

日もいと長きにつれづれなれば

夕暮れのいたう霞みたるにまぎれて

例の  
かの小柴垣のもとに立ち出で給ふ

つれづれなり

夕暮れ  
霞

小柴垣：木で編んだ垣根

1

お供の  
人々は歸し給ひて 惟光朝臣と

のぞき給ば ちようどすべそこの西向きの部屋で  
ただこの西面にしむ

持仏据ゑ奉りて行ふ尼なりけり。

行方

★「尼なりけり」について

尼なりけり

「尼だつたのだなあ

↓

2

簾少し上げて 花奉るめり。中の柱に

寄りゐて 脇息の上に経を置きて

(気分が優れなさそうに)

いとなやましげに読みゐたる尼君

普通の身分の女

ただ人と見えず。

四十余ばかりにていと白うあてに

瘦せたれどつらうきふくらかに

奉る。

あてなり。

まみのほど 髪のうつくしげに

(切りそろえられた髪の束)

そがれたる末も なかなか長きよりも

(この上なく)

こよなう今めかしきものかなと

あはれに見給ふ。

うつくしげなり。

なかなか。

今めかし。

(小ぎれいな) 清げなる大人二人ばかり (その他) さては

童へぞ出で入り遊ぶ。中に、十ばかり

にやあらむと見えて、白き衣、山吹

などのなえたる着て走り来たる女子

清げなり。

★「十ばかりにやあらむについて

十ばかりにやあらむ

⇓

あまた見えつる子どもに似るべうも (似ても似つかず)

あらずいみじく生ひ先見えてうつく

しげなる容貌なり。髪は扇を

ひろげたるやうにゆらゆらとして

涙をふいたせいで

顔はいと赤くすりなして立てり。

あまた。

生ひ先く容貌なり

⇓

★なぜ 顔が赤くなるほど

泣いていたのかな？

「何ごとぞや。糞と腹立ち給るか。」

とて 尼君の見上げたるに顔少し

おぼえたる尼君のところあれば 子なめり

と見給ふ。

おぼゆ。

★「子なめり」について

子なめり

<

子なんめり

<

子なるめり

↓

7

「雀の子を犬君が逃がしつる 伏籠の

うちに籠めたりつるものを」とて

いと口惜しと思り。

口惜し。

★若紫は 捕まえていた雀を犬君に

逃されてしまったため 泣いていた

8

いつものように

このみたる大人「例の心なしの」

うかりものが

「のようにな」と

叱たりされる

かかるわざをしてさいなまるる。「そ

いと心づきなけれ、いづ方か

雀の子は

まかりぬる

★「例の心なしの

★「「その結びに注意！

↓

心づきなし..

まかる..

たいそうかわいらしく

いとをかしう、やうやうなりつるものを

鳥なども「そ見づくれ」とて立ちて

見ける

行く。髪ゆるるかにいと長く

髪が豊かで

めやすき人なめり。少納言の乳母

とぞ人言ふめるはこの子の

後見なるへし。

であるのだらう

★「鳥なども「そ見づくれ 補足

鳥なども「そ見づくれ

めやすし..

後見..

まゝなんて幼いことよ 聞き分けなくて  
尼君 「いで あな幼や。言ふかひなう」

いらしやる」とよ

ものし給ふかな おのがかく今日

明日におぼゆる命をば 何とも思し

たらで 雀慕ひ給ふほどよ

おぼゆ

おのがかくおぼゆる命

↓

思す

生き物を捕えることは  
罪得ることぞと常に聞「ゆるを

心憂く。」とて「ちや。」と言は

膝をついて座った。

ついあたり

聞「ゆ

心憂し

つらきいとらうたげにて 眉の

ほのかにけふるように美しく見え

わたりうちけぶり いはけなく

かき上げた

あどけなく

かいはりたる額つき 髪ざし

成長する

いみじうつくし。ねびゆかむさま

ゆかしき人かなと 目とまり給ふ。

らうたし…

いはけなし…

★「ねびゆかむさま」について

ねびゆかむさま

ゆかし…

というのも

さるは 限りなう心を尽くし

その見た目

聞こゆる人にいとよう似奉れるが

まもらるるなりけりと思ふにも

涙ぞ落つる。

限りなし…

聞こゆ…

★限りなう心を尽くし聞こゆる人に

⇓

まもる…

少女の

尼君 髪をかき撫でつつ、「けづること

髪をかきこと

いやがり

をうるさがり給ど をかしの御髪や

きれいなお髪だこと

たいそう頼りなくていらしゃるのが

いとほかなうものし給ふぞ

あはれにうしろめたけれ

★「その結びに注意!



の年齢

かばかりになれば いかかからぬ人も

これほど幼稚でない人

あるものを 故姫君は 十ばかりにて

父上に先立たれなさらた頃には

殿に後れ給ひしほどいみじう

分別がおありになつていたのだよ

ものは思ひ知り給りしぞかし。



ただ今おのれ見捨て奉らばいかで

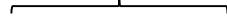
↓尾君

世におはせむとすらむ」「とて

いみじく泣くを見給ふも すすろに

悲し。

いかで…



いかで世におはせむとすらむ

↓

すすろなり…

幼心地にも さすがにうちまもりて

〔若紫は〕

伏し目になりてうつぶしたるに

こぼれかかりたる髪つやつやと

めでたう見ゆ。

さすがに…

めでたし…

見ゆ…

こゝ見る…

生ひ立たむありかも知らぬ若草を

おくらす露ぞ消えむそらなき

またみたる大人「本当にげに」とうち  
同じくそこに座っている女房が

泣きて

★「露の縁語

★歌意

これから成長していく、先もわからない  
若草を、この世に残して消えてゆく  
蒸発する露は、消えようにも消える  
空がないことよ

19

初草の生ひゆく末も知らぬ間に

いかでか露の消えむとすらむ

と聞ゆるほどに、僧都あなたより

来て

★「露の縁語

★歌意

初草のような少女の成長を見届ける  
ことなく、どうして露のようなあなた  
が先に消えようとしているのだろうか  
消えないでいてほしい

聞ゆる

あなた

20

「ここは外からまる見えなのではないでしょうか  
ここにあなたはあらはにや侍らむ。」

今日しも端におはしましけるかな

この上の聖の方に、源氏の中將の

瘡病みまじなひにものし給ひけるを

ただ今なむ聞きつけ侍る。

侍り。

★「今日しも端にけるかなについて

ものす。

21

いみじう忍び給ひければ

知り侍らで、ここに侍りながら

お見舞いにもうかがいませんでした  
御とぶらひにも詣でざりける。」と

のたまは

★「侍りの違い

知り侍らで…

「ここに侍りながら…

詣し…

22

まあ大変！  
「あな<sup>ま</sup>い<sup>み</sup>じ<sup>や</sup>。いとあ<sup>や</sup>し<sup>き</sup>さま<sup>を</sup>を

たいそう見苦しい様子を

人や見<sup>つ</sup>らむ」ととて簾下ろしつ。

「この世にののしり給ふ光源氏

かかるついでに見奉り給はむや。

簾下ろしつ

⇓

ののしる。

世を捨てたる法師の心地にも

「い<sup>み</sup>じ<sup>う</sup>世の愁<sup>を</sup>忘れ<sup>、</sup> 寿<sup>命</sup>が伸<sup>び</sup>る<sup>気</sup>がする

光源氏の君の「様子である

御ありさまなり。いで御消息

聞<sup>こ</sup>えむ」ととて立ち音すれば

「帰り給ひぬ

源氏は

世を捨つ…

世を捨てたるくありさまなり

⇓

消息。

心惹かれるかわいい人  
あはれなる人を見つるかな

かかればこのすき者どもはかかる

歩きをのみしてよくさるまじき人  
思いがけない人

をも見つくるなりけり。

すき者・

★「見つくるなりけり」について

見つくるなりけり

↓

たまに出かけてさえ  
たまさかに立ち出づるだに

このように思いがけない人を見つるものだ  
かく思ひのほかなることを見るよと

をかしう思す。

さてもいとうつくしかりつる見かな

何人ならむかの人の御代はりに

明け暮れの慰めにも見ばやと思ふ心

深く取りつかれてしまた

深うつきぬ

かの人の御代はりに



明け暮れの慰めにも見ばや

